閃輝暗点

世の中、訳の分からないことばかり。病気も、原因が分からない、治療法も分からない。なんてことはざらにある。

72歳のA子さん。長年、高血圧症で通院している。「センセ、またよ。閃輝暗が」と渋い顔である。何もしてないのに、突然、右の視野に、ギザギザしたノコギリ状の光が現れる。だんだん大きくなって、ものが見えにくくなる。が、20～30分で消えていくのだという。頭痛も吐き気もない。頭のMRI（磁気共鳴画像）の検査をしても、新たな異常はみられない。

実は、A子さん。若い頃は、この閃輝暗点を前兆とする片頭痛に悩まされていた。60歳近くになってからは前兆だけで済むようになり、吐いて寝込むような頭痛は起きなくなった。が、閃輝暗点の方は、多い時で、月に1、2度も起きることがある。

「予防薬も飲んでいるのに、どうして?」と問われて、いつも、ワッシーは小さなハートを痛めている。

閃輝暗点の発生メカニズムは、まだ明らかではない。だから、治療法もこれといったものはない。昔は、主流は血管説であった。ギザギザの視野異常は、視覚の中枢である後頭葉の血管が収縮して血流低下を起こすからと考えられていた。が、今はもっぱら、「皮質拡延性抑制説」が用いられる。後頭葉の神経細胞に始まる興奮と抑制が周囲に伝搬していくからだという。が、なぜ決まって後頭葉の神経細胞が興奮し出すのかはわからない。

ところで、拡延性抑制部位では、二次的な血流低下がみられるという。が、脳梗塞は滅多に起きないようだ。でも、高齢者は、既に脳動脈硬化などの危険因子を持っていることが多い。ことに、閃輝暗点を繰り返すA子さんのような患者さんは、ホント大丈夫だろうか?ワッシーの心は拡延するばかりである。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：6/27北國新聞掲載）